

《論文》

## 『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について(2)

矢放 昭文

### はじめに

前稿「『日本広東学習新語書』所収仮名音注の特徴について」<sup>(1)</sup>では；

- (1) 自称代詞の語系、音節末尾に /-i/ を持つこと。
- (2) 撮口呼を欠くこと。
- (3) 常用の全濁声母が有気音で記されること。
- (4) 中古音の以母、影母、云母字がサ行濁音で表記されており Fricative Retroflex または Alveolar であったと推定できること。

以上の4点より、同書のA類片仮名音注は客家方言の特徴を示すものとの結論を示した。但しこれら4項目については、手続き上の問題も含めて最終的なものではない。今後の課題として一層の詳細な報告を必要としている。

一方で、同書所収の片仮名音注の特徴を考察するには、A・B二層のみの枠組設定では不十分であること、様相の性格が相当に複雑であること、を認めるに至っている。

小稿では、これらの課題を解きほぐすための基礎作業として、特に人称代詞の語形、音節末尾に /-i/ を持つこと、を手掛かりとして関連事項および資料から判明したことを報告したい。

### 1. 人称代詞 /-i/ 尾と助数詞 /-i/ 尾について

『新語書』収録の人称詞については、その冒頭より /-i/ 形を認めることができる。二人称、三人称も併せて、その字体も含む記録を挙げると以下の如くなる。

	一人称	二人称	三人称
単数	我 ゴー、ガイ	爾 ニー	伊 キー
複数	我我 ゴーゴー 阮的 グワン テ°ツ ガイガイ ナイ 涯 ガイ (24)	你 (等) ニーニー	伊們 (キームン)*

一人称代詞「我」の読音については「ゴー、ガイ」2種類の語音を記録しており「ゴー」は読書音、「ガイ」は白話音と見做すことができる。客家語白話音についての調査報告資料には、今日では参考に資すべき資料が豊富に揃っている。その中で比較的古いものとして、例えば、広東省東北部五華県の華誠客家語音を報告した李作南1965<sup>(2)</sup>を出発点に据えることができる。同氏の報告する五華県の客家語人称代詞は下記の如くである；

	第一人称	第二人称	第三人称
単数	ŋai <sup>2</sup>	ŋi <sup>2</sup>	ki <sup>2</sup>
複数	ŋai <sup>2</sup> teu <sup>1</sup>	ŋi <sup>2</sup> teu <sup>1</sup>	ki <sup>2</sup> teu <sup>1</sup>

第一人称 / ŋai<sup>2</sup>/ については、『新語書』インフォーマントは片仮名で「カイ」と表記しており、李作南1965が報告する如く、語頭子音の鼻音成分をすることは難しい。但し遠藤雅裕2016にしたがえば鼻音成分は確認することができる<sup>(3)</sup>。第二人称 / ŋi<sup>2</sup>/ は「ニー」、第三人称は「キー」となることも順当である。

### 1.1 第一人称

客家語の第一人称については、例えば李如龍・張雙慶1992によれば<sup>(4)</sup>、34調査地のうち30地点で /ŋai<sup>2</sup>/ 等 /ŋ-/ 声母及び /-i/ 尾を有している。『新語書』は「ガイ」とするが、片仮名では語頭子音の鼻音成分の表記ができないために「ガイ」としているのであろう。

また前稿でも触れたが自称複数を示す「阮」字は閩語資料に認められる<sup>(5)</sup>。同字について『新語書』は「グワンテ°ツ」「ガイガイ」「ナイ」3通りの語音を示すと同時に「涯 ガイ (24)」をも注記する。「グワン」はおそらく話者に

とり読書音を示していると思われる。

また『新語書』第一章末尾の欄外に「注意」と記し；「阮ハル又ハ您ニ對シテ稱スル語ニシテ相對スルモノナク單ニ我等ト稱スル時ニハ咱ヲ用フ」(52) と言う注記は『新語書』インフォーマントの基礎方言考察に重要な価値を持つ。二人称と相對して始めて成立する「我等」認識を表示するという点では、「阮」字が閩語使用の字体であることに関係なく、『新語書』基礎方言の特徴の一つと見做すことができるであろう。また「咱」について「相對スルモノナク單ニ我等ト稱スル時ニハ咱ヲ用フ」点も貴重な注記であるが、更に掘り下げた議論は今後の課題としたい。

## 1.2 類別詞（助数詞または量詞）

「ガイガイ」について、前置の「ガイ」は一人称 / \**ŋai*/ を示すものと判断できるが、後置の「ガイ」は助数詞（類別詞または量詞）であると思われる。この点については小稿では J.Norman 1988 の記述に従う<sup>(6)</sup>。

同氏は李方桂 1971<sup>(7)</sup> に従い上古漢語 \**ngar*> 中古漢語 MC *ngâ*、を指定した上で；The Yue dialect of Táishān has *ŋoi*<sup>1</sup> (OC \**ngar*>MC *ngâ*:) …These two forms are also found in Kèjiā: *ŋai*<sup>2</sup> 'I, me' and *kai*<sup>5</sup> 'individual measure word'. と述べ、客家語の一人称 'I, me' には語頭に鼻音成分を持つ *ŋai*<sup>2</sup> を、後置の助数詞には *kai*<sup>5</sup> を比定している。

『新語書』では、例えば (P1640044) に「這個リーカイ、ツーカイ、チエーカイ」、「彼個キーカイ、ピーカイ」、「彼彼個キーキーカイ」、「那一個ナイカイ、チーヂックカイ」という音注例を認めることができるが、各例の前置成分についてはここでは触れないとして、後置の「個」についてはいずれも「カイ」である。

遠藤雅裕 2016<sup>(8)</sup> は『新語書』の語学情報研究に最も近い関連性を持つと推測される資料であるが「一個人」について *zit*<sup>5-32</sup> *kai*<sup>21</sup> *ŋin*<sup>55</sup> を報告している。『新語書』成立時にも *kai*<sup>21</sup> という類別詞として使用されていたものと考えられることができる。

## 1.3 二人称

二人称については『新語書』は「ニー」とするが、李作南 1965 によれば

ŋi<sup>2</sup>、李如龍・張雙慶1992では n (10地点)、ŋi (3地点)、ni (6地点)、ŋi (3地点)、gi (1地点) 等を参考にすることができる。また遠藤雅裕2016では ŋi<sup>55</sup>である。

#### 1.4 三人称

三人称については、『新語書』は字体として「伊」「彼」を使用するものの、読音は一律に「キー」である。複数形「伊們」については、紙面の汚れのため第一冊 P1640044では読み取ることができないが、P1640105に「阮要伊們不要」という文例があり「ナイ ジャウ キームン ンム ジャウ」という音注に従い「キームン」を採用することができる。

「私供ハ望マスガ彼人等ハ望ミマセン」という意味注記により、「伊們(キームン)」は三人称複数を示す代名詞と見做すことができる。客家語白話音「キー」と読書音「ームン」を合成した語彙であろう。

「伊」字は『新語書』全篇を通じて「キー」と注記されている。その一部として：

咱去叫伊 カイ キー ハム キー 我々ハ、彼ノ人ヲ、呼ビニ往キマセウ(511)

伊欲我去 キー オイ ゴー キー 彼ノ人ハ、私ノ往クイヲ望ミマス (512)

伊常常來此處 キー シヨンシヨン ロイ ツー チュー (749)

伊罕得出門 キー ハン テッ チュツ ムン (751)

伊有去彼處三次 キー ユー キー ガイ チュー サーム パイ (433)

伊來我歡喜 キー ロイ ゴー ホアン ヒー (622)

伊怒氣我 キー ヌー ヒー ゴー (623)

伊是造化的人 キー ヘー ツオー ファー テ°ッ ギン (626)

等を挙げるることができる。

なお他の客家語資料では「渠」或いは粵語と同様「佢」を使用する例が多く、「伊」はむしろ閩語方言字とされることが多い<sup>9)</sup>。『新語書』「伊：キー」が客家音を記すという点は貴重な例と言えるであろう。『新語書』インフォーマントからみれば一種の訓読であったと思われる。

## 2. 甚么人:マカイギン

「甚么人:マカイギン:誰ダレ、誰タレ」(17)、「甚么:マカイ:ナニ、何」(22)について、前稿では「文言音」ではなく「白話音」であること、『新語書』インフォーマントは“what”に該当する漢字として「甚麼」を使用し「マカイ」を片仮名音注として付したことを述べるに止まった。

この語形についても、三人称「伊」「キー」と同様、一種の訓読であると判断できる。

「誰」について遠藤雅裕2016は「ma<sup>33</sup>sa<sup>55</sup> □儕」を挙げる。また田中智子2012は /mag<sup>3</sup>ge 麼个 / としている<sup>(10)</sup>。

李如龍・張雙慶1992は「誰」という語彙ではなく「誰的」として man<sup>3</sup>ŋin<sup>2</sup>, mak<sup>3</sup>kai<sup>5</sup>ŋin<sup>2</sup>, mek<sup>3</sup>nin<sup>2</sup>等を挙げるが34調査地点を通じての共通項を見出すことは難しい。

また同書 (pp.425) は「什麼」について /mak<sup>7</sup>kai<sup>5</sup>/ 等を清溪、揭西、西河、陸川、香港など5箇所で報告している。

因みに香港では「mbak<sup>2</sup>kai<sup>53</sup> 脈個」等の、いずれも脱鼻音化した音型例が荔枝莊、麻雀嶺、赤泥坪、楊小坑4箇所(新界)で報告されている<sup>(11)</sup>。

さらに『漢語方言詞匯・第二版』(1995)<sup>(12)</sup>は「誰」について「man ↓ ŋin」、  
「什麼」について「七个 mak<sup>3</sup> kɛɿ」を挙げる。

いずれにしても『新語書』「甚么人:マカイギン」は「什麼」+「人」より構成されており「誰」そのものに人格を認めた表現ではない。

## 3. 他の語音要素

A・B二層のみの枠組設定では不十分であり、様相の性格が相当に複雑であることを語る事例として少し述べておきたい。

『新語書』第二冊 P1640105にみられる一文「阮要伊們不要:ナイ ジャウキームン ニム ジャウ」「私供ハ望マスガ 彼人等ハ望ミマセン」にみられる事例では、第一人称複数形として「阮」が使用され、語音「ナイ」が充てられている。或いは「カイ」の誤りであるかも知れないが「グワン テ°ツ」「ガイ

ガイ」以外の第三例であるならば、今のところ、解決は難しい。

「要」「不要」に充てられた「ジヤウ」については前稿で報告済みであるが、中古以母、影母、云母字にサ行濁音を充てる例であり、遠藤雅裕2016にも多くの事例が報告されている。

「不」について「ンム」を充てる点については、『新語書』インフォーマントは否定詞「無」音を念頭に置いていたことに由ると思われる。『漢語方言詞匯・第二版』（1995、pp.607）によれば、「唔：m-」（梅県）が報告されている。現代書面粵語と同様である。「ンム」はこの語音を表したものであろう。

P1640105に認められる「冇：パーン」（480）音についても客家音では解決できない。閩語「boɿ」（例えば厦門）に類する語音の可能性があるが、ここでは事例の報告に止めておきたい。

他の事例として「攏」がある。P1640106に見られる「来去攏不欲：往クモ来ルコトモ好ミマセン」、「高低攏好：高クテモ低クテモ宜イ」、「攏未曾到：決シテ往ツタコトハアリマセン」という文例に見られ「ルン」または「ヌン」と標記され /n-//l-/ の混用を示している。この点についても一層の調査を必要としている。

## 小結

黄遵憲（1848-1905）が「吾手写吾口」（吾が手で吾が口から出る言葉を記す）という有名な詩句を述べたのは1868年、同氏21歳の時である。当時は、すでにバーゼル教会所属のプロテスタント宣教師が梅県を中心として広東東北部で布教し始めて約20年を過ぎていた頃であり<sup>(13)</sup>、黄氏が、宣教師の操る、漢字の読み書きができない人々でも聴いて理解できる口頭講話、白話布教の力に、何らかの啓示を覚えていた可能性は高い。

にも関わらず、士大夫、読書人などの識字層を外れた当時の人々にとり、耳で聞いた言葉を書記することには非常な困難があったはずである。『新語書』インフォーマントはおそらく経商従事を生業としていたと思われるが、士大夫・読書人などの識字層とは異なる分野での、生業に必要な漢字知識は有していたにもかかわらず同時にその限界も想定すべきである。

『新語書』成立したのは1899~1900年間のことであり、陳独秀（1879-

1942)、胡適(1891-1962)らが、誰でも書いて解る口語文体の実現を目指した、いわゆる五四白話運動の主導者となる契機としての1912年の民國革命まで、まだ10年以上の歳月があった。

それまでの、人々の意思疎通媒体としての文体はやはり文言文のみであったことを視点にいれると、『新語書』が示す読音、字体およびについての語彙・語音の多様性はまさにこのような当時の文体を巡る事情によるところが大きい。

だからこそであるが、自らの手で自らの発話を日本の漢字音により中国の方言、特に東南方言について記録した資料として『新語書』は実に貴重な価値を有していると考えることが可能である。

## 註

- (1) 矢放昭文2019「『日本広東学習新語書』所収片仮名音注の特徴について」、神田外語大学『日本研究所紀要』第11号、pp.208(43)-199(52)。
- (2) 李作南1965「客家方言の代詞」『中国語文』1965年第3期、pp.224-231.205。
- (3) 遠藤雅裕2016『台湾海陸客家語語彙集』、中央大学出版社。
- (4) 李如龍・張雙慶1992《客贛方言調査報告》廈門大學出版社、pp.419。
- (5) 梅祖麟2000〈閩南語複數人稱代詞形成合音の年代〉《語言變化與漢語方言・李方桂先生記念論文集》丁邦新・余霽芹編、中央研究院語言學研究所籌備處、華盛頓大學、pp.261-269。
- (6) J.Norman 1988 "CHINESE" CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS, 'Dialects of the Southeast' pp.212。
- (7) Li, Fang-kuei 1971. Shàngǔyīn yánjiū (上古音研究). *Tsing Hua Journal of Chinese Studies, New Series 9, 1-61*. 《上古音研究》商務印書館, 1980. 北京。
- (8) 遠藤雅裕2016、上掲書、pp.433。
- (9) 他の客家語資料、例えば『客語聖詩』台灣教會公報社1999、田中智子2012も「亍」を使用する。一方「渠」については李如龍・張雙慶1992などが使用する。
- (10) 田中智子2012『客家語入門(改訂版)』(東京外大 AA 研)。
- (11) 張雙慶・莊初昇2003『香港新界方言』商務印書館、pp.707。
- (12) 北京大学中国語言文学系語言学教研質編、語文出版社、pp.564。

- (13) JESSIE GLUTS AND ROLLAND RAY LUTZ 1998, "HAKKA CHINESE CON-  
FRONT PROTESTANT CHRISTIANITY, 1850-1900", M.E. Sharpe, Armonk, New  
York.

[付記]：小稿は、JSPS 科研費（課題番号17K02753）による研究成果の一部である。